

官民学連携による子育て支援の成果と展望

－「おやこ DE 広場にこにこキッズ」の事例から－

野上 遊夏 渡辺 明子 岩崎 淳子 佐藤 賢一郎
深津 さよこ 須田 仁 西 智子*

1. 緒言

「おやこDE広場にこにこキッズ(以下、「こにこキッズ」と略す)」は、松戸市の地域子育て支援拠点事業「おやこDE広場」¹⁾の一つとして、2011(平成23)年5月に松戸市との連携により聖徳大学内に開設され、聖徳大学児童学研究所により運営されている。

「おやこDE広場」は、乳幼児と保護者が気軽に利用でき、情報交換や仲間づくりの場として子育てを支援することを目的として松戸市内の各所に開設され、NPO法人、社会福祉法人など民間の多様な運営主体は「おやこDE広場ネットワーク」を組織している。

「こにこキッズ」では、通常の開館のほかに、高齢者との交流会、地域の子育てイベントへの参加などの取り組みも行っている。また、その前身である「聖徳にこにこキッズ」からの大学独自の取り組みを引き継いでおり、子育て支援の実践経験を積むことを大学のカリキュラムに位置づけるなど、行政、民間に大学が加わった、独自の官民学連携による子育て支援を実践している。

本稿では、こうした「こにこキッズ」の実践事例について、1) 設立の背景と現在の事業概要、2) 2つの独自の取り組み、3) 地域連携について報告し、行政(官)・民・学連携による子育て支援の成果及び今後の課題を考察した。

2. 「こにこキッズ」開設の背景

2.1. 地域における子育て支援の取り組みに至る経緯

地域の間関係の希薄化等、地域の子育て力が低下したといわれてから久しい。しかし、子育ては家族の中だけで完結するものではない。とくに、虐待死の要因分析では孤立化が要因としてあげられるなか、子育て中の家庭の孤立が問題視されようになり、地域の子育て力向上が子育て支援において重要な位置を占めるようになってきている²⁾。子どもの育ち・子育て支援という言葉が市民権を得たのは1994(平成6)年の「今後の子育て支援のための施策の基本的

方向性について(通称エンゼルプラン)」からである。2003(平成15)年の次世代育成対策推進法の制定により、地方自治体と事業主に次世代育成のための行動計画策定が義務づけられて以来、地域ぐるみ、また働き方の見直しを含め社会全体で子どもを育て、子育て支援をするという考え方が広まりつつある³⁾。

地域の子育て支援では、在宅子育て支援の方策の一つである「地域子育て支援拠点事業」が、2008(平成20)年に児童福祉法に位置づけられた。この事業は、2015(平成27)年度に子ども・子育て支援法が施行され、市町村が行う子育て支援13事業の中に法的にも位置づけられている。事業体の設置については、国庫補助対象分を2020(平成32)年度には8,000か所という数値目標があげられている。どの市町村でも3歳未満児の子どもをもつ親と子の支援には力を入れるようになってきている⁴⁾。

2.2. 松戸市の現状

聖徳大学のある松戸市も10年前から子どもの育ちをサポートする環境として、松戸市次世代育成行動計画(平成17～26年度)により子育て支援事業実施施設を整備してきた。松戸市は、2016(平成28)年3月31日現在、人口483,760人であるが、15歳未満の年少人口40,528人(8.4%(うち0～3歳児人口15,518人(3.2%))、65歳以上の高齢人口120,125人(24.8%)と、平成27年10月1日現在の全国統計での年少人口12.7%、高齢人口26.7%と比較し、高齢化率はやや低いものの、著しく年少人口の少ない地域である。そして、3歳未満児の7割近くは家庭で育てており、3歳以降の幼稚園就園を望む家庭の多い地域であることから、いかに在宅の子育て家庭を支えていくかが課題となっている。

未就学児を子育て中の親の状況について、松戸市の調査では、同居親族のいない核家族中心の現代の子育てにおいて、就園前の0、1、2歳児の日常的な支援の必要性や地域で子育て仲間をつくることの重要性が示唆されている⁵⁾。子育てに対して、肯定的なとらえ方をしている人が多いが、

* 日本女子大学 家政学部 児童学科 特任教授

不安や、気持ちにゆとりがないことを示す回答もあり、身近な生活の場において、「子育てパートナー」のいる親子の集える場の必要性は同調査報告のなかでも指摘されている。

こうした実態を受けて、松戸市は地域子育て支援拠点事業に力を入れており、2016(平成28)年3月現在、子育て支援センター5か所・おやこDE広場15か所等、子育て中の親子が集うことができる施設は市内に20か所にのぼる。

2.3. 聖徳大学における地域子育て拠点づくり

聖徳大学が、「にこにこキッズ」を運営し地域の子育て支援に取り組むようになった経緯は、以下の通りである。

松戸市の掲げる「子育てにやさしいまちづくり」というテーマのもと、地域の子育て支援に聖徳大学が取り組んだのは、2005(平成17)年、私立大学学術研究高度化推進事業「連鎖的参画による子育てのまちづくり」社会連携研究事業を文部科学省に選定されたことによるものである。この研究の一環として、2006(平成18)年7月13日に、子育て支援社会連携研究センター「聖徳にこにこキッズ」を開設した。子育ての学びと活動を通して、地域の人々の社会参加、すなわち子育て参加を促し、子どもが自らを十分に発揮できる地域環境づくりに貢献するための具体的活動として親子の集う場の運営を行った⁶⁾。

このセンターの利用者は多く、開設からの2年半の間(2009(平成21)年12月31日時点)に24,011人の親子が利用し、うち1、2歳児の利用が67%にのぼった。また、学生ボランティアの参加、実践授業の取り組みも行われた。一方、地域子育て支援の各団体及び行政との関わりをもち、立場を超え、広く松戸の子育てに関わる団体の支援者同士が気軽に情報交換をする場をもつ取り組みも行った。ここでは、行政、社会福祉協議会、各団体・NPO等に広く呼びかけ、「顔の見える地域づくり」、「相互理解」をねらい、大学は、行政でも支援団体でもない第三の立場で、講演会等の企画も開催した。また、その会議に学生も参加し、地域の子育て課題を共有し学ぶ場とする試みも行った。後述する松戸市の官・民あげての松戸子育てフェスティバル(2007(平成19)年第1回～現在に至る)も発足したばかりであり、その実行委員会は他の団体と交流するまでに至っていなかったため、まずは連携を支援するため、大学も参画していった。

子育て支援社会連携研究センター「聖徳にこにこキッズ」は、研究期間の終了とともにセンターの役割を終え、2010(平成22)年6月に閉館した。この「聖徳にこにこキッズ」に対する地域の子育て拠点としてのニーズは高く、ここでの活動が現在の「にこにこキッズ」の基盤となっている。

3. 「にこにこキッズ」の主な事業内容について

3.1. 「にこにこキッズ」の目的

前節で述べたように、地域での子育て支援の場としてのニーズに応えることが、第一の目的である。また、地域での多世代交流、市民同士の交流を促進する場としても期待されている。さらに、大学が運営することにより、学生が支援の場を体験し協働する経験を積むための場としても考えられている。大学にとっては、専門性を生かして地域貢献することにつながる。以上のような目的を達成するため、「にこにこキッズ」では、通常の開館に加えて、多様なプログラムを組み合わせて運営している。以下、主な事業内容について検討していく。

3.2. 事業の概要

開設した当初は、週3回、10～15時までの1日5時間の開館であった(2015(平成27)年度からは、10～15時の開館を週4日とした)。子育て支援スタッフ3名と大学の専任教員が運営責任者及び協力員として関わり、学生ボランティアも参加した。運営の方針としては、子育て支援社会連携研究センター「聖徳にこにこキッズ」における実践と実績を基礎とし、ノンプログラムの形態を主としながら、イベントプログラムを組み合わせて、親子の居場所づくり・交流、相談・援助、情報提供等、国の地域子育て拠点事業の枠組みの中で、松戸市ならではの事業を展開している⁷⁾。また、大学の教職員が運営に関わるという特徴を生かし、とくに、聖徳大学の学生ボランティアが恒常的に協力し、さらに、地域の高齢者、中学生・高校生等の多様な世代との連携事業を継続的に実施している。イベントは、年間12回以内をめやすとして実施している。

最も基本的な事業は、安心して親子で遊べる場を提供することである。そのなかで、子育ての悩みや不安に関する相談にのり、他の親子との交流のきっかけづくりを行う。そのために、「にこにこキッズ」では、定期的に次の3種類の行事を開催している。

- ①絵本の読み聞かせ：その日の参加者の年齢や興味・関心に合わせてスタッフが絵本を選んで読み聞かせを行う。毎月2回行う。
- ②赤ちゃんタイム：0歳児向けのスペース(赤ちゃんコーナー)を通常の開館時よりも広く設定し、乳児とその保護者が安心して利用できる時間帯(10～11時30分)を毎月3回設けている。
- ③おしゃべりタイム：保護者同士が交流しやすくする場として毎月1回開催している。スタッフが話題を提供してきっかけをつくることが多い。

季節ごとの伝統行事や文化の伝承については、単発のイ

イベントを行うのではなく、日常に季節感や行事を取り入れる方針で実施している。七夕の時期は笹を飾り、短冊に願い事を書いて吊す、節分では豆まきのお話しをするなど、季節の行事を乳幼児向けにアレンジして取り入れている。この場合、乳幼児よりも保護者が季節を意識できるよう伝えることに重点を置いており、館内の装飾も季節感を表したものに替えている。また、季節に応じてこいのぼりやクリスマス飾りなどを手づくりし、持ち帰る企画も行っている。

この事業は、児童学研究所長、知財戦略課・地域連携課の支援を受けて行っている。行政との連絡は大学事務局を通じて行っており、また、保育スタッフは開館前後には知財戦略課と連絡事項の確認を行っている。教員は主に運営を統括し、学生と支援の場をつなぐ役割を担っている。現在、運営スタッフは、有資格者4名がパートタイムの子育て支援スタッフとして登録され、常時3名勤務の態勢をとっている⁸⁾。配置が原則となっている「子育てコーディネーター」については後述する。なお、急な病気やけがの対応については、大学の保健センターとの連携をとっている。

3.3. 施設・設備等の環境

「にこにこキッズ」は大学の鉄筋コンクリート造の建物の1階及び地階部分に置かれている。利用者へ開放している1階プレイルームの延べ床面積は約50.0㎡である。館内のレイアウトは図1に示す通りである。東側に大きな窓があるため採光は十分であり、室内は常に明るい。

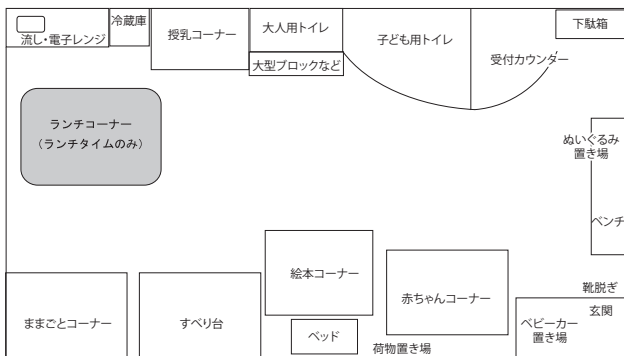


図1. にこにこキッズプレイルーム平面図

遊具は室内用すべり台のほかは固定の大型のものは少ないが、ボールプール、トンネルなど、状況に応じて倉庫から出し入れしているものもある。木製の玩具が多いことが特徴であり、利用者の傾向に合わせて環境整備をしている。

3.4. 利用状況

開設からの利用者数は表1に示す通りである（なお、以下に示す資料の2011(平成23)年度分は、開館した5月～翌3月までの11か月分のデータである）。利用者の内訳は、図2に示すように0歳児が増加している。

表1. 開設から5年間の年度ごとの延べ利用者数(単位：人)

年度	2011年	2012年	2013年	2014年	2015年
大人	2,830	3,735	3,333	2,815	3,250
子ども	3,176	4,437	3,754	3,223	3,653
総数	6,006	8,172	7,087	6,038	6,903

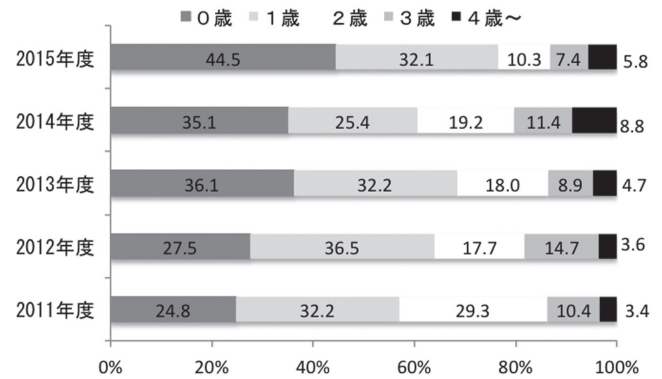


図2. 子どもの年齢別利用者数の割合

図3は、0歳児の利用における赤ちゃんタイムの実施日と通常の開館日との平均人数の比較である。実施日は通常の2倍程度の利用がある。赤ちゃんタイムの開催は、月に1回であったものを平成24年の夏から2回に、平成27年度からは3回へとニーズに合わせて増やしてきた。

保護者の内訳は母親が大半を占めているが、出産を控えた母親の代わりに祖母が連れてきたり、休みの日に父親が

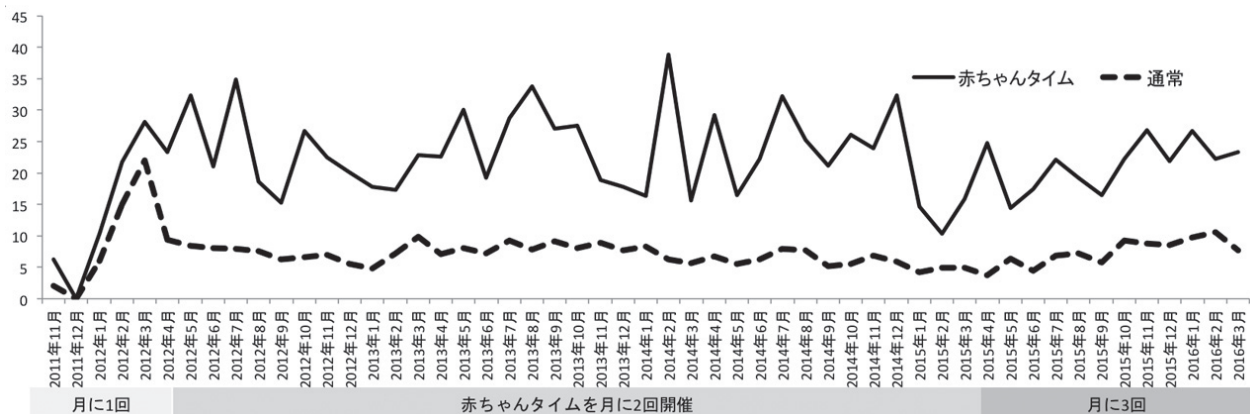


図3. 赤ちゃんタイムの日と通常の日における0歳児の月別利用者数平均の比較(人)

連れてきたり、あるいは、母親と父親が同行したりと複数の保護者で来館する場合もある。また、くり返し来館する親子が多いことも、この広場の特徴である。

表2及び図4に授業やボランティア活動での学生の来館の実績を示す。学生の長期休業期間に減少する傾向があるものの、年間を通じて学生の関わりが継続して行われている。

表2. 来館した学生の総数(単位：人)

年度	2011年	2012年	2013年	2014年	2015年
学生数	348	347	429	617	484

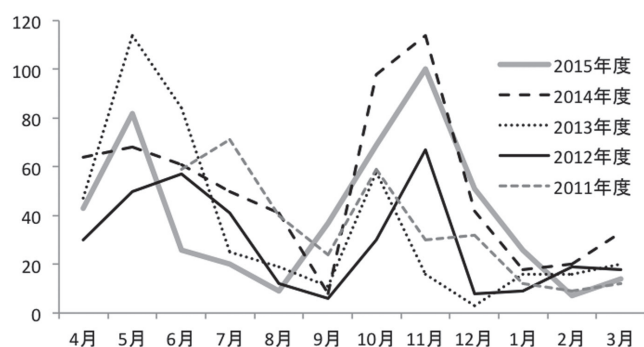


図4. 授業・ボランティアによる学生の来館数(人)

3.5. 子育てコーディネーターの配置

「子育てコーディネーター⁹⁾」は、各おやこDE広場に1名以上を配置することになっている。「にこにこキッズ」には2名の子育てコーディネーターがおり、常時1名は勤務するようにシフトが組まれている。その役割は、幼稚園・保育所等への入園に関わる情報提供や、子どもの発達に関する相談にのることである。全てのスタッフが、子育てに関する相談に対応しているが、「子育てコーディネーター」のバッジを付けることにより有資格者であることが誰にでもわかり、またコーディネーター自身は気にかかる親子に積極的に関わられるようになっている。

3.6. 「にこにこキッズ」に関する情報提供の方法

行事予定を含め、開館日程を知らせ、子育て情報を盛り込んだ「おたより」を隔月で発行している。これは、保育スタッフに聞き取りを行った上で教員が作成している。松戸の子育て情報を集積したホームページ「まつどあ」や聖徳大学知財戦略課のホームページにも「おたより」を掲載し、予定を知らせている。ホームページでの情報提供は活用されており、事前に予定を把握して行事に合わせて来館する保護者の声が多くきかれる。また、当館のお知らせ以外に、他の広場のおたよりもカウンター脇に置き、行政のお知らせやチラシなども配布している。

「おたより」には、日程や子育てに関する情報のほか、学

生ボランティアの活動の様子や、利用者のコメントなどを掲載し、身近な施設と感じられるように意図している。大学の授業のなかで、保育士養成コースの学生が「おたより」の一部分を執筆することもあった。

3.7. 事業についての考察

初めての子育て、とくに1歳未満の親子にとっては、ちょっとした育児の不安を先輩の母親やスタッフに気軽に聞ける「赤ちゃんタイム」は利用者が多く、年度を追うごとに回数を増やしてきた。「おしゃべりタイム」は、初めて来館した保護者を地域とつなぐ催しとして重要である。これらは、あらかじめスケジュールを公開しており、利用者は行事を楽しみに来館している。また、赤ちゃんタイムであることがわかっている場合、幼児の保護者は時間をずらして来館するなど、利用者同士で配慮するという協力がみられる。

開設時からの利用者数は多少の増減がある。これは、市内の近隣エリアにおやこDE広場の数が増えていることから、利用者が分散する傾向があり、外的な要因によるものであると考えられる。一方、「赤ちゃんタイム」は、回数が増えたにも関わらず、平均の利用者数が変わっていないことから、0歳児と保護者が安心して過ごせる場に対する潜在的なニーズが高いことがうかがえる。図3に示した利用者がとくに多い月は、赤ちゃん(育児)教室¹⁰⁾が実施されている。赤ちゃん教室がその後の利用のきっかけとなっており、低月齢児の保護者支援という役割を十分に果たしているといえる。

親子の集う場として大切なことは、気軽に立ち寄り、子どもが伸び伸びと遊び、親がほっとした気持ちで穏やかに安心ができることである。また、子育ての初期を支えていくことは育児不安・虐待の予防へとつながる。支援スタッフは共感と見守りの基本的態度をもって、家族の成長に寄り添う「子育てパートナー」であり、子どもの最善の利益の尊重という視点を持ってアドバイスできる身近な相談者でもある。こうした点で、利用者同士をつなぐ役割と、地域と利用者をつなぐ活動ができているといえる。

4. 「にこにこキッズ」における独自の取り組み

学生が日常的に親子の支援の場に参加すること、また、スタッフの専門性を生かしたイベントの実施は、大学が運営する広場である「にこにこキッズ」の特徴といえる。ここでは、学生参加の取り組み、及びミニイベントについて検討する。

4.1. 学生の参加

4.1.1. 学生が支援の場に参加する活動の目的

学生は支援の場を体験し、子どもの発達・親子の関係性の学び、支援者としてのスキル向上、子育て支援システムの理解等を通じ、学ぶ意欲の向上につながると考えられる。

4.1.2. 学生ボランティアの活動

「にこにこキッズ」では、学生ボランティアの活動が活発に行われている。ここでは、「にこにこキッズ」で行う学生ボランティアの内容、そして、学生をボランティアとして「にこにこキッズ」に派遣するための仲介役となる大学側の役割について述べる。

ボランティアの定義としては様々な見解があるが¹¹⁾、「にこにこキッズ」においてもスタッフの数が十分であるとはいえない現状もあり、ボランティア学生の活動によって、スタッフの仕事を多少なりとも補完することが期待されている。

学生ボランティアが行う具体的な内容としては、以下の4点があげられる。①利用者である乳幼児とともに遊ぶ、②利用する親子への見守りと対話、③施設の整理・整頓作業、④行事等の際の利用者へのおみやげ製作、である。

このように、学生ボランティアの活動は、おおむね「保育の補助的な役割」として想定されている。そして、ボランティア活動を行う学生の大半は、「保育」を学んでいるという実態がある。2016(平成28)年8月現在、ボランティア登録をしている学生は68名である。内訳は、児童学科36名・社会福祉学科17名・保育科8名・他学科7名となり、多くは「保育士資格」の取得を目指している学生である。

ボランティアの採用と、学生側からの自発的な意志に基づいた、学びにつながるボランティア活動への仲介役として、大学では「にこにこキッズ」学生ボランティアを統括する担当教員が存在している。主な役割は、年に2回の「にこにこキッズ」ボランティア説明会を行うことや、「にこにこキッズ」専用のボランティア登録カードの受付と管理、学生のスケジュール調整と「にこにこキッズ」への連絡係としての業務などを行っている。これは、大学事務局におけるボランティア担当部署とは一線を画している。

4.1.3. 大学の授業との連携

大学児童学部児童学科、心理・社会福祉学部社会福祉学科、心理学科、短期大学部保育科、大学院児童学研究科において、「にこにこキッズ」での体験を授業の一環として位置づけている。主な授業は、「乳児保育Ⅱ」「乳児保育特論Ⅱ¹²⁾」「子育て支援Ⅲ¹³⁾」「保育実践演習」であり、「にこにこキッズ」が0～3歳児をもつ親子を対象としていることから、乳児保育や子育て支援に関係している授業となる。カリ

キュラム上の位置づけが明確な2科目について事例を述べる。

①事例1「乳児保育特論Ⅱ」の実践内容

「乳児保育特論Ⅱ」の授業では、現在の乳児保育では、どのような課題があるかをグループで討議する。主な視点は、「家庭や地域において、人や自然と関わる経験が少ない」であり、その課題を解決するために、乳児との触れ合い遊びや自然を取り入れた保育が学生から多く提案されている。これらを踏まえて具体的な活動案を作成し、「にこにこキッズ」において3時間程度の実践を行う。きめ細やかな乳児との触れ合いを経験するために、「にこにこキッズ」での実践は、毎回1～2名の学生としている。

②事例2「子育て支援Ⅲ」の実践内容

地域における子育て支援事業の役割や子育て支援者の資質について学び、実際に学生が企画プログラムを立案・実施する。事前告知ポスターを作成し、「にこにこキッズ」での学生におけるイベントとして広報している。具体的な内容は、手遊びや親子のふれあい遊び、リズム遊び、手作り玩具をつかって遊ぶなどの制作活動や親子運動遊びなど多岐にわたる。また子育て講座や親同士が話しやすくなるような、おしゃべりタイムの企画等、子育て支援の現場ならではの保育を展開する¹⁴⁾。

4.1.4. 学生の参加についての考察

ボランティア活動を自らの学びにつなげたいという学生の思いが、ボランティア説明会等を通じて強く感じられる。福祉ボランティアに詳しい谷口は著書¹⁵⁾の中で、ボランティアの動機を10項目に分類し、その中でも、何かを勉強しようという気持ちでボランティアに入る学生が多いことを指摘している。現代の学生が、このような「保育」のボランティアに興味を持つ理由として、核家族化から自身の成長の中で「子ども」と触れ合う経験が少ない環境にあることがあげられる。つまり、保育に必要な「現場経験」が不足していることから、「にこにこキッズ」のボランティアにも強い関心を示していると推測される。

「にこにこキッズ」での学生ボランティアの活動は、公的サービスとしては対応しがたい福祉のニーズについて、柔軟かつ多様なサービスを提供できることに加え、学生の自主性及び創造性が最大限に発揮される場であり、学生に社会参加への機会を与えると共に、学生の学びへとつながることが意義としてあげられる。今後も、大学側からのスムーズな仲介をしていくことで、「にこにこキッズ」及びボランティア学生への双方におけるメリットが期待でき、ますますの成果が得られることと考えられる。

また、授業における実践は、乳児保育などで学んだ乳幼児の発達に関する理論と保育者としてのあり方とを、実践

での関わりに結びつける機会とすることを意図して実施している。「乳児保育特論Ⅱ」、「子育て支援Ⅲ」を通じて、乳児と学生、乳児と保護者の触れ合い遊びにより、乳児へのスキンシップが図られる。これらを通じて、学生が、乳児にとっての愛着や基本的信頼感の形成に役立つこと、保育実習では学びにくい保護者支援の重要性を体得すること、乳児の発達を再確認し個々への援助に気づくこと¹⁶⁾、そして、乳児へのさらなる親近感と愛情をもつことを重視している。さらに学生が抱えているであろう乳児への援助についての不安¹⁷⁾を少しでも解消できるよう、乳児と関わる機会をもつことへの役割も期待されている。「子育て支援Ⅲ」の実践では、学生自身が主体的に企画・立案した子育て支援プログラムの実践を通して、実際の親子の反応や感想をもとに、自己評価や相互評価を行い、子育て支援事業における保育士の役割と支援の方法について学ぶことができる。

「にこにこキッズ」での実践が終了した後に、自己評価と振り返りを行う。代表的な学生の学びは、「子どもの個々の発達への気づき」と「にこにこキッズを利用する保護者のメリット」についてである。前者は、乳児特有の人見知りや母親を安全基地として探索を行う様子が観察され、後者は、保護者同士の交流や、専門スタッフの存在や環境への安心感について考察されている。学生が乳児との触れ合い遊びを行う際に、実習とは違い、そばにいる母親の存在が乳児の精神的安定を図る上で重要であることを学び、また、その母親への情報提供や安らぎを与える「にこにこキッズ」の役割を学んでいると考えられる。乳児の発達を踏まえ、その発達に合った保育を行うと同時に、保護者への支援についても具体的に学ぶことができている。

4.2. ミニイベント

4.2.1 ミニイベントの目的

イベントは、親にとっては子育ての方法や子どもと共に遊ぶことの楽しさを学び、子どもの成長を客観的に見ることが出来る場である。日常とは異なる人や環境と接することにより、親子とも成長につながる。それはスタッフが子どもの発達過程を踏まえて適切な対応をすることにより強化される。現在は試行の段階である2つのイベントについて考察する。

4.2.2. 高齢者との交流

高齢者と乳幼児・母親の多世代交流という取り組みは全国的に徐々に広がっている¹⁸⁾。これまで、地域連携の一環として、敬老の日を中心とした「交流ウィーク」を設定し、地域の高齢者に呼びかけてきた。しかし、孫と一緒にといったきっかけがない限り足を運びづらいこともあり、交流が進まなかった。そこで、2015(平成27)年度からは、「にこに

こキッズ」に集う乳幼児、保護者と認知症介護予防教室参加者との交流事業を行った。

2016(平成28)年1月から3月にかけて月に1回、認知症介護予防教室参加者が「にこにこキッズ」へ行き、利用者の親子と触れ合う機会を設けた。この交流事業は、乳幼児と親のいるところに高齢者が出向く形である。今回この企画の参加者は、前年に開催された地域包括支援センター主催の認知症介護予防教室を受講し、その後のフォローアップ教室に参加した高齢者である。一般的な認知症介護予防教室である本教室の内容は認知症の予防及び重度化を防ぐために、体操や脳トレーニングを行うことが主たる企画である。それに加えて教室へ参加することで外出機会が乏しくなることを防ぎ、閉じこもりによる心身機能の低下を防ぐこともねらいとしている。さらには他人とのコミュニケーションを図ることによって脳を十分に働かせることを目指している。そこで、「にこにこキッズ」との交流が企画された。

この交流事業では、はじめに「にこにこキッズ」の階下フロアにおいて、教室参加の高齢者に対して地域包括支援センター職員が介護予防の意義や効果について説明し、準備体操(ストレッチや全身を使うゲーム)を行った。その後、DVDソフトを用いて簡単なクイズを通じた認知機能を向上させるプログラムを行った。そして乳幼児とその保護者との交流に関する注意点などを説明し、スムーズに導入できるように配慮した。それを受け、教室参加者である高齢者が「にこにこキッズ」のプレイルームに行き、30分という短い時間であるがキッズ利用者との交流を行った。事前に「にこにこキッズ」の利用者にも告知してあり、参加した親は子どもを高齢者に抱き上げてもらうなど、高齢者に対して親和的に接していた。

4.2.3. 音楽活動の試みーミニコンサート

「にこにこキッズ」における音楽分野での企画・活動は、これまでは、主に手あそびや歌あそびが中心で、学生による授業での実践と連携した中で行われていた。あるいは、赤ちゃん教室など行事の始まるの部分で、その場を和んだものにするために取り入れられていた。

2016(平成28)年度からは、音楽担当の教員による音楽あそびの時間を設けた。位置づけとしては、あくまでも赤ちゃん教室やおしゃべりタイムの延長線上にあり、保護者のニーズに合わせた音や音楽に関連した遊びを提供するものである。実施するにあたり、スタッフ・教員・保護者間での何気ない会話の中で、普段の音楽的な遊びの状況を把握するように努めた。音楽あそびについて保護者の一番の希望は、手あそびを覚えたいということであった。子どもと楽しく一緒にやりたい、もしくは歌いたい、メロディ

(あるいは歌詞、手の動きなど)を忘れてしまう、知らない歌は覚えきれず残念な思いをしている、との声がかかれた。行事に参加した時に子どもが楽しくやっていた曲を、家に帰って親子で楽しみたいために、メモをとり必死に覚えるという母親もいた。そこで、試行の活動タイトルは「赤ちゃんと歌あそび」とした。

「赤ちゃんタイム」に手あそび・ふれあいあそびを含め、20分のプログラムを実施した。導入では、「たなばた」の歌を声楽家が聴かせ、雰囲気づくりを行う。歌に合わせて親子とも座ったままのふれあいあそびをする。乳児用のマラカスをを使い、合奏を行った。このイベントでは、通常は設置されていないキーボードを用意した。

4.2.4. ミニイベントについての考察

高齢者との交流事業は試行段階であるが、乳幼児の笑顔や若い母親との交流に、高齢者も始めは戸惑いながらも徐々に会話が弾む様子がみられた。今回は乳幼児とその保護者との交流であるため、高齢者からの一方的な話ができず、コミュニケーションをとるにも、乳幼児が多い「にこにこキッズ」利用者との交流は高齢者にとって、認知症予防、認知症の症状悪化を防ぐためにも効果がある事業といえる¹⁹⁾。

ミニコンサートを実施した際には、子どもと一緒にあそんで、子どもをより楽しませたいという保護者の積極的な姿が見られた。その一方で、子どもがその歌や音楽の何に興味をもって反応しているかわからないと困惑する親、さらには、周りの赤ちゃんは楽しそうに反応したり遊びができたりにしているのに、うちの子はなぜできないのか、という焦りをもつ親もいる。これら様々な思いをもって「にこにこキッズ」に足を運ぶ保護者を、音楽面から支援できるのではないかという示唆が得られた。

5. 大学による子育て支援を通じた地域連携

5.1. 地域連携の目的

地域に開かれた大学として、その専門性を地域に広く開放し、貢献することは地域の高等教育機関として取り組むべき課題とされている。「子育てにやさしいまちづくり」を目指す松戸市において貢献していくこともその一つである。大学が子育て支援に参加することは、①地域子育て支援拠点事業の場における効果的な支援のあり方の検討・質の向上、②地域の子育て支援者の養成・現任者の質の向上、③子育てをしやすい地域社会の醸成にあると考えられる。子育て支援を行って貢献することだけではなく、次世代を担う学生の成長に寄与するという観点からも欠かせない。

5.2. ネットワーク会議への参加

おやこDE広場が開かれた当初からネットワーク会議の充実が図られ、顔の見える支援者同士のつながりの中に発展的に継続している²⁰⁾²¹⁾。この略称「おやこネット」は、松戸市内の各おやこDE広場からスタッフの代表が出席して、共通の課題や新しい取り組みについて検討する会議を毎月行っている。「にこにこキッズ」のパートタイムの子育て支援スタッフから代表者が出席し、実際の運営上の検討事項について、具体的に行政や他の子育て支援団体と話し合う場である。おやこDE広場の利用者は、複数の広場を利用しており、また保健所などでも気になる親子を把握している。ネットワークに参加していることにより、「にこにこキッズ」と他の広場、行政との連携が密になっている。

5.3. 松戸子育てフェスティバルへの参加

毎年2月の最終日曜日に松戸市健康福祉会館ふれあい22において松戸子育てフェスティバル²²⁾が開催される。おやこDE広場ネットワークが「松戸子育てフェスティバル」実行委員会に属しているため、「にこにこキッズ」からも学生はボランティアスタッフ、教員は実行委員として参加している。

2016(平成28)年は「ひろげよう・つなげよう・子育ての輪」をテーマに松戸市の子育てに関わる各行政機関、団体が集結して、市民の子育てを応援する様々な企画を実施した。

学生のボランティアについては「にこにこキッズ」のボランティア登録をしている学生をスタッフの対象とし、毎年30名以上の学生が参加している。2016年の参加は児童学科、社会福祉学科、保育科の学生であった。当日の運営に携わる役割が多いが、その年によって、学生が遊びのイベントの企画や、オープニングで歌を歌うなどの活動を行うこともある。

5.4. 赤ちゃん教室

「赤ちゃん教室(旧名称：育児教室)」では、来館した保健師または栄養士(場合により歯科衛生士)、健康推進員による直接のアドバイスを受けられるため、平均して35組の親子の参加がある。

プログラムは、乳児の疲労やストレスに配慮し午前中の1時間程度におさめている。司会・進行は「にこにこキッズ」のスタッフが行う。まず、「にこにこキッズ」のスタッフが自己紹介し、手遊びや親子遊びなどでリラックスした後、保健師または栄養士による一般的なアドバイスを中心とした講話がある。その後、子どもの月齢ごとに車座に集まり話し合いを行う。この月齢ごとの集まりでは、子育て支援スタッフか大学教員が1名ずつ各サークルに配置されるようにし、子育ての相談にのり、参加者間の交流をはかる。

話題として多くあがっているのは、発育・運動機能の発達、離乳食や睡眠などについての相談である。育児書やインターネット上の育児情報サイトに提供されているような基本的な内容が多く、緊急を要する深刻な案件はみられない。

5.5. 地域連携についての考察

ネットワーク会議への参加や「赤ちゃん教室」の開催により、他のおやこDE広場や関係機関との情報交換が円滑に行われるようになってきている。関わり方が気になる親子がいる場合、保健師や他の広場のスタッフも同じ親子の様子に気づいており、緊急に介入する必要のないケースでは、地域の施設で見守る態勢がつけられている。

また、子育てフェスティバルに「にこにこキッズ」として参加することの意義は大きい。大学のスタッフが実行委員会を通して意見交換を積み重ねることは松戸市の行政及び子育て支援団体との関係を深める機会となっている。フェスティバルの来場者の多くは松戸市に住む子育て中の家族であり、学生は、松戸の子育て情報や子育ての状況について、行政及び子育て支援団体の方と触れ合いながら理解を深める場となっている。ボランティアとして参加することで、学生は子育て家庭の親子と触れ合い、子育て支援のニーズに気づき、行政や様々な支援団体が担っている役割とその重要性を認識する体験となっている。

一般に大学教員の発言は特別に扱われがちな面があり、他の民間運営者とフラットな関係になることが難しい。そうした中で、松戸のNPO組織などの民間団体は実績、経験とも豊富であり、行政、大学などの専門機関と活発に意見交換が行われている。

一方で「赤ちゃん教室」では、大学が関与していることの影響は大きいと考えられる。高度情報社会であっても、専門家の意見を対面で聞くことにより不安が解消される様子である。情報が多過ぎること、相矛盾した内容が流布していることなどにより、判断に自信がもてない場合には、専門家が実際に親子と接して相談に乗ることが一層重要となっている。前述したように、おやこDE広場を初めて利用するケースが、この「赤ちゃん教室」であることも多く、その後の広場の利用につながる重要な催しである。また、市の事業に場所を提供することで、行政の職員との情報共有もしやすくなる。行事そのものが関係機関どうしの情報共有の場として有効であるといえる。

6. 今後の課題

6.1. 運営に関して

運営上の問題は少ないといえるが、親も子どもと共に育つ、また支援者や地域も育つといった視点での課題があげ

られる。ひとつは、現場スタッフと大学教員スタッフの連携の在り方と役割分担の問題である。事務局は知財戦略課・地域連携課であり、この三者が十分に連絡を取り「にこにこキッズ」における子育て支援の意義の理解、またその具体的方法、現場における懸案事項(時に個別ケースへの共通理解)等、密に連携を図る必要がある。教員は授業その他の業務が多く、なかなか現場に赴くことができないというジレンマを抱えており、現場と乖離する場合もある。また、日常的な運営に関しては、スタッフの意識の高さと熱意に支えられている面が大きく、パートタイム職員に過度の負担がかかりやすい。今後、具体的には、親を育てる視点での行事の持ち方や作品づくり等さらに検討を重ね、子育て支援の場として伝えていくことを明確にし、実践の場において日常的に支援者相互が学び合うことを通じて、より適切な子育て支援における対応方法やプログラムをつくり出していく必要がある。

開設時間等の設定にも課題がある。「にこにこキッズ」の場合、他のおやこDE広場とは異なり、運営主体である大学にとっての中心的事業ではなく、また、松戸市との連携による委託事業であることから多くの制約がある。大学の行事、運営方針との整合性、教職員の負担、スタッフの時間的・労務管理上の制約等、検討し解決すべき問題である。同時に、開設時間、日程等に関しては利用者の立場に立った配慮も必要である。松戸市の委託事業であることから、財政的には大学の負担は少ないように見えるが、人的資源を投資するという点では、地域への貢献度は高いといえる。しかし、耐用年数を過ぎた玩具の買い換えに要する費用の問題など、委託事業の中での運営費の問題は今後の検討課題である。

さらに、情報発信と利用者との相互・共通理解のために、情報発信ツールの活用には改善が必要である。例えば、「おたより」では日程を知ること以上のニーズが、利用者には意識されていない。また、大学が発信するものは、知育、早期教育ととらえられ誤解を生じることがある。そうした期待が一般に高いことがうかがえるため、注意をはらいながら情報提供に工夫をしていきたい。

6.2. 授業における実践及び学生ボランティア参加について

各授業により目的・参加人数なども様々であり、ボランティア活動との日程調整も煩雑で、どの時期にどのような目的で「にこにこキッズ」に学生が参加するのかを把握するためには、教員同士並びにスタッフとの連携が欠かせない。現状においては、運営に際してパートタイム職員の熱意に依存している面も否めず、今後は学生指導における教員間の指導体制の明確化、支援の場としての「にこにこキッズ」

の役割理解を学内において徹底し、共通認識を得ていくことも必要である。また、保育者養成の視点からは、どのような段階において体験学習を取り入れることが効果的なのか、授業科目、対象学年・時期・内容・事前事後指導等々、体験学習として、より効果的なプログラムの確立に向けて検討していくことも必要である。課題意識と実践力をもった、より専門的な保育者の育成のために、大学の授業と「にこにこキッズ」との連携を充実させていきたい。

学生が支援の場に参加するということは、あくまで学生、利用者相互にプラス効果があることを念頭に置くのは当然である。学生が子どもと遊ぶことで、親は子どもから一歩離れ、ゆとりの気持ちと時間をもつことができ、かつ客観的に我が子のかわいさに気づく時間でもある。また、親が母親の先輩として学生に対応している場面もあり、親としての自信をもつ機会にもなっている。また、「親」という立場ではなく、人生の先輩として学生にあたたかな言葉をかけている姿がみられるように、学生の参加は、利用者の親子にも様々なプラスの影響を与えていると考えられる。今後は、利用者への効果という観点からも検討したい。

6.3. ミニイベントについて

平成27～28年度にかけて試行したミニイベントの課題について述べる。

「高齢者との交流」に関しては、30分間という短い時間の中で、交流するまでに至らない参加者もいたこと、認知症介護予防教室自体の参加者が少ないことがあげられる。また、「にこにこキッズ」利用者と、認知症介護予防教室参加者の高齢者とが一緒にできる企画や行事を用意するなど、交流を促進するための運営側の改善が必要である。

「ミニコンサート」は、家庭においても親子で無理なく楽しく遊ぶために、保護者のニーズに耳を傾ける必要が高い。一つの手あそび歌からの展開をワンポイントアドバイスで伝えることや、楽譜や歌詞・遊び方を示したプリントの提供、無理なく覚えられるように同じ歌の繰り返しの実施などが考えられる。また、「親子で楽しめるコンサート」を企画し、「子どもにとっての日常」がゆがめられず、「にこにこキッズ」という「いつもの場所」で、親の精神的負担がなく、さらには音楽的に質の高いコンサートを実施したい。演奏中でも周囲に気兼ねせずに親子とも楽しめる環境を整えることにより、子育てで遠ざかっていた生演奏を聴くことができる。学生にとっても、保育音楽にとどまらず「音楽的技術や質の向上」への気づきになると考えられる。

6.4. 地域連携と大学の役割

学生が地域連携の活動を経験することを一日のみの学びや体験にとどまらず、行政及び子育て支援団体と直接関

わるような参画の仕方を、教育機関である大学として模索していくことにより、地域の子育て支援に主体的に関与する志向性の獲得につなげていくことが求められる。

また、今後必要とされるのはアウトリーチの視点である。この場に自主的に参加できる親だけではなく、参加できない親子への対応も視野に入れる必要がある。これはおやこDE広場そのものが直接支援するというより、養育訪問事業等の他事業間での連携が図られることにより進展を図りやすい。行政及び「おやこDE広場」関係者との連携は、気になるケースに関して共通理解ができるような段階に入ってきている。先述したように、現在、同質の支援団体の連携は進んでいる。今後は他事業との連携を一層推進することが必要であり、とくに妊娠初期からの母子保健との連携は切れ目のない支援を実現するためにも重要である。

多世代交流の事業においても、高齢者や中・高校生自身が子育て支援に関わることにより、地域の一員として生きていく上での存在意義の確認や自己肯定感を高めることにつながっていく。地域住民の中には、老若男女を問わず子育て支援に関して熱い思いをもっている方々も少なくない。地域の潜在的な子育て力を実際の活動に結び付けていくためのイベントなどの仕掛けや機会をつくり、有効な方法を開発していくことも必要である。「子育て」や、「子育てを社会で支えていく活動」について、今まで関心がなく機会がなかった人々に対しても、それぞれの専門分野から、社会で子育てを支えることに対する意識の醸成を図っていくことも、大学の地域貢献としての意義と考える。市全域では難しい面もあるが、身近な地域単位で就学後まで見据えた立体的な連携のシステムの構築が期待される。様々な専門性を包含している大学であればこそ、内部の連携を図りながら地域のシステム作りに貢献することも可能であると考えられる。

子育て支援は、支援をする側・される側の二軸ではなく、当事者参画が有効に機能しやすい支援部門といえる。子育て支援拠点事業のように公的な制度が整う中で、親の企画によるイベント、サークル活動等、子育て中の親が様々な能力を発揮しやすい環境整備をしていくことが必要になってくる。親自身が社会に働きかけ、生活の充実感を得るような時間を持てるよう支援していくことも親のウェルビーイングからは有効であろう。

今後は松戸市の子育て家庭に対する支援の課題を現場の近くで把握し、本学が保有する保育の専門性を活かしながら地域の関係機関のネットワークにおける中核としての役割をさらに推進していくことが肝要と思われる。そのためには、スタッフ・教員間の連携の強化と研修やケース討議

等の機会を保障し、地域に向けて専門性を発揮するための時間的・物理的環境を整え、支援者の質を向上するためのシステムの構築等バックアップ体制を強固にしていくことが必要である。

7. 総括

以上をまとめると、子育て支援のあり方が多様化し、地域との連携が重要となっているなかで、「にこにこキッズ」は開設の目的に沿って運営しており、利用者のニーズに応じた工夫をはかりつつ、大学が運営主体である特性を生かして地域に定着してきたといえる。しかし、社会的なニーズにさらに応えようとするには、大学の研究や業務としての位置づけが曖昧であり、専門家の関与が限定されている点が課題であるため、今後、より具体的な施策が必要である。

執筆分担：設立の経緯(西智子)、事業内容及び論文全体の構成(野上遊夏)、高齢者との交流事業(須田仁)、学生ボランティア(佐藤賢一郎)、実践授業(深津さよこ)、ミニコンサート(渡辺明子)、子育てフェスティバル(岩崎淳子)

注及び引用文献

- 1) 松戸市地域子育て支援拠点事業実施要項
- 2) 大日向雅美(2014)「子育て支援のこれまでとこれから新たなステージを迎えて」『発達』 vol.140, ミネルヴァ書房, 2-9
- 3) 渡辺顕一郎・橋本真紀編(2015)『地域子育て支援拠点ガイドラインの手引き』中央法規
- 4) 内閣府編(2016)『平成28年版 少子化社会対策白書』日経印刷
- 5) 平成25年9月未就学児保護者1,251名の回答。(松戸市(2015)『松戸市子ども総合計画～子ども力でつながる未来～平成27年度～31年度』)
- 6) 松島均(研究代表者)(2007)「子育て支援社会連携研究センター『聖徳にこにこキッズ』」『連鎖的参画による子育てのまちづくりに関する開発的研究』27-48など
- 7) 前掲1)
- 8) 前掲1)の実施要項により、職員の条件は「保育士または幼稚園教諭等の資格を有する者とする。松戸市に認定された松戸市子育てコーディネーターを1名」とされている。
- 9) 2011(平成23)年度から実施されている松戸市による認定制度である。とくに、行政・医療機関・相談所などと連携し、関係機関をつなぐ役割をもつ(松戸市子育てコーディネーター事業実施要項(2011))。
- 10) 松戸市保健福祉課が行っている事業である。「にこにこキッズ」では、生後2～9か月の乳児及びその保護者を対象として、近隣の施設と重ならない日程で年に2回程度開催している。
- 11) 公的サービスとしては対応しがたい福祉需要について、とくにボランティアの人材は有用であり、価値の高いものであるとされている(厚生労働省 社会・援護局地域福祉課(2007)「これからの地域福祉のあり方に関する研究会資料」)。
- 12) 「乳児保育特論Ⅱ」は、保育士養成コース4年生の選択科目である。「乳児保育についての幅広い視点を持ち、専門的な知識の習得と、問題点の把握、それらを基盤にした実践力を獲得すること」を目的としている。
- 13) 「子育て支援Ⅲ」は、保育士養成コースの4年生を対象とし、「子育て中の保護者の気持ちに寄り添い、子どもと保護者の関係に留意しながら支援のできる保育者の専門性を身に付け、実践に生かす力を養うこと」を目的としている。
- 14) 西智子(2014)「子育て支援と乳幼児の遊び」『子育て支援と心理臨床』 vol.8, 福村出版, 50-60
- 15) 谷口明広他(1995)『福祉ボランティア』朱鷺書房
- 16) 勝間田明子(2015)「教職実践に関する一考察—子育て支援室の環境構成に対する気づきに注目して—」鈴鹿短期大学紀要, 35, 75-84
- 17) 叶内茜・永瀬祐美子・福元真由美・田代幸代・小暮ゆり・倉持清美・吉田伊津美(2016)「保育教諭の養成における実習経験の成果と課題:附属幼稚園未就園児の会『にこにこふ～よん』をフィールドにして」東京学芸大学紀要, 総合教育科学系, 67(1), 81-92
- 18) 厚生労働省(平成28年)「地域包括ケアの深化・地域共生社会の実現」資料
- 19) 多湖光宗(2010)「幼老統合ケアの理論と実践—「高齢者福祉」と「子育て」をつなぐケアの実践と相乗効果—」生活科学研究誌, 大阪市立大学, 8, 1-14など
- 20) 西智子, 津留明子(2009)「子育て支援センターにおける体験学習の効果」聖徳の教育む技法, vol.4, 63-82
- 21) 子育て支援社会連携研究センター(2010)「『聖徳にこにこキッズ』報告書」聖徳大学
- 22) 主な内容として①子育て情報&相談コーナー②親子のふれあい遊び③いろいろ子育て相談④その他の親子参加型イベントなどが行われている。